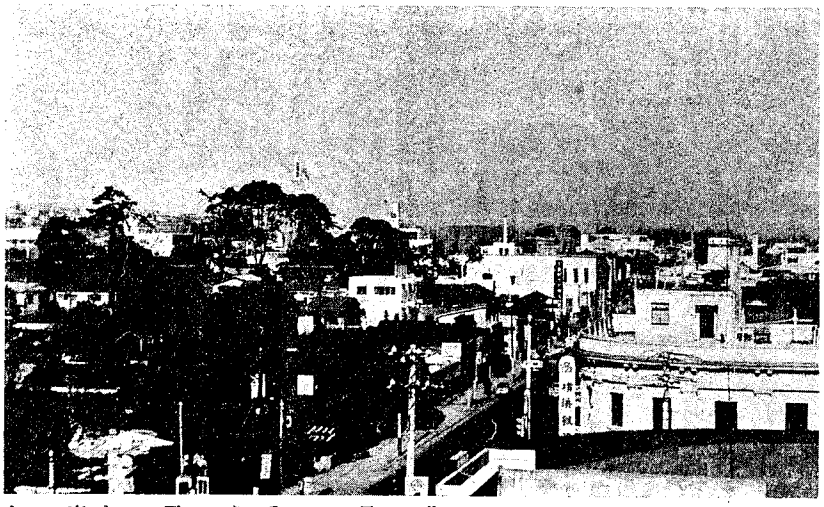
小田原史談

第22号
発行所　小田原史談会
小田原市幸一丁目
郷土文化館内

印刷の御用は
清水印刷
小田原市幸一ノ一七
電話小田原三四七七番



変貌した小田原

井上康文

私は小田原を愛していた。

小田原町幸町一丁目一番地で生れたのがひどくうれしく、そう書くのが好きだった。上総屋染物店、あるいは紺屋登次郎という小説を書きたいと思っていた。いまでも書きたいと思っている。

私は小田原が好きだった。

割屋敷・お濠端・隅屋敷・お厩小路・上幸田・竹ノ花・山角町・宮ノ前・青物町（あーもんちょう）台宿・お花畑・代官町・千度小路、そういう町たちに私の足跡がある。昼顔の咲いていた蒼浪閣の古いペンキのはげた西洋館の閉ざされた窓を思い出す。

私は後年、豪勢な料亭につけられた蒼浪閣の大きい看板を見、その蒼浪閣で小田原市民歌の選をした。もうあまり自由に口のきけなくなった福田正夫と、ちょっと畑違いの感じをもったが芸術には熱心な北条秀司君が一緒だった。

御用邸に皇太子殿下（大正天皇）がおいでになるとき、私たちは唐人町に並んでいた。がたがたゆれる電車・人車鉄道・軽便鉄道・相馬さんの原っぱ・養蚕場いまのだるま通りと、割屋敷との間は桑畑だった。いまある公民館と小田原郵便局との間は、片側に小さい川があり、そのむこうの濠端との間に土手があり、川と土手との間は田ン甫だった。もちろん、いまのお城跡の濠のところも田ン甫だった。

懐しいなその頃の小田原、明治三十七八年、日露戦争のあとの、なにか平和になった日本の小さな城下町そこにいた少年や少女たち。だがいま小田原は変貌した。田舎芸者がこてこてと白粉を塗ったように。

私は小田原に変心された。恋人に捨てられたように腹立たしく、時には憤りももって小田原の悪口をいう。私はラジオでも文章でも小田原を世界一の美しい町だと言い続けてきたのに……望郷、小田原には私の心の住家さへない。

ふるさとの梅に語らう人もなし

この句を、もの十年も前に作った。そして、いまも同じ心境である（小田原出身・詩人）

写真は幸一丁目より見た市街の一部

直情直言

義田長平

小田原史談会々報は多数の意見によって創刊され、既に二十二号に達した。今日まで月報が歓迎され、多くの人々に読まれたか否かは、私は知らない。たとえそれが読まれなかったとしても、今日まで続けてきた編集者の苦心は一方ならざるものがあったに違いない。寄稿者の努力もまた認めねばならぬ。ただ問題は今後続けるにしても、これでよいかというにある。月報は単に会員だけのものではない。その使命はもっと高いところにあって、市民をも益し、後世にも残さるべきものでなければならぬ。従ってわれわれは、今日に満足すべきものではないと思う。どうしたら、もっと意義あるものに育てあげるかが今後の課題である。

古代のわが郷土

内田武雄

（一）

小田原市の千代台地に奈良時代から平安初期にかけて大寺院の存在したことは現在この地から発見された礎石やまたは鬼瓦、蓮華文様の軒丸瓦、飛雲文の軒平瓦、ぶどう文の軒平瓦、塔瓦（五重塔の形をした瓦）などの奈良時代の優秀な古瓦によっても容易に想像することができる。この千代台の寺院については、従来は伝記によって、弓削道鏡が孝謙天皇の天平勝宝五年に唐の大明寺の僧鑑真の来朝の時にもたらした、十一面観音を安置して建立されたものの遺跡と考えられ、この寺院を千葉山弓削寺、俗に千代観音と称せられて来た。現在千代台地の西方飯泉にある。飯泉山勝福寺通称飯泉観音と言われているのは後に千代観音を飯泉に移したものであると言われている。勝福寺の十一面観音は一木彫の平安期の作品として昭和三十二年神奈川県文化財の指定をうけたこの伝説の信憑性は将来の究明に待つとしても、千代台の寺院跡は奈良期の大寺建築の遺跡であることは、確かである。また台地を昭和三十二年からの発掘の結果、当時の礎石や仏像の胸かざりや、羅髪（仏様の髪の毛）（いづれも土製のもの）弥生式土器や土師器の灯明皿など二百個ほど其他建物に使った釘など色々発見されている。更にまた台地周辺の深田から昭和三十一年土地改良工事の際、奈良時代から平安にかけての頃と推定される田舟・田下駄・田鍬などの木製農機具と当時の米倉の梯や建物の一部なども発明されているところを見ても、古代農耕文化が早くからこの地帯に根をおろしていたことを知ることができる。

この地方一帯は昔は府中と言って（ふなか）の地名が古くから伝わっていた。今でも上府中・下府中の地名があるのを見ても、所謂府中の意である。千代の名称も国府の「庁」の遺名でないかとも言われている。

「大日本地名字書」高田郷、今上府中の大字とす。「新篇鎌倉志」「鶴岡宝蔵」和名抄足柄下郡高田郷に相異なり近年この地に上府中・下府中二村号を起す。府中は郷庄などの古名にて国府本郷村にあり古へ府庁の所在なりと記してあるのを見ても、相模国府、国分寺のあった地域であったのではないかと推定される。いづれにしても太古から奈良、平安初期にかけて永い期間、足柄地方の文化の中心地であったことが推定できるのである。

国府津は今の中郡二宮町国府の地に、平安後期以後国府庁が置かれていた。当時相模国府と京師とを結ぶ要津としてこの地名が起きたのだと言われているが、もし上府中・下府中（府中）が国府の所在地である。証拠が確実となったなら、むしろ第一期国府の港として地名が起きたのであるとも考えられる。

小田原市田島の地名に舟子と言うところがある。舟主があって舟子があるのであるから、あるいは、当時国府の港の船頭の居た所ではなかろうか。又高田と田島、国府津の岡、元の片岡村に、舟免と言う地名が残っているのを見ても第一期国府は、府中になくてはならないと私は思う。

この千代台地が北から南に約三十メートルから十二三メートルに漸減する高さをもって、酒匂平野を見おろす台地を構成していることは、国府の占地の場所としては他国の例に徴しても誠に恰好の立地条件にあると言わねばならない。千代台の東南の国府津の地を石野氏は第二次余綾の国府の外港と言われたが、国府津が設けられて、国府の津がその機能を発揮した時代はいうまでもなく令制の栄えた時代であったから、国府の力の衰えた平安末期に遷ってきた余綾の国府の時代に、この国府津が置かれたとする如きは到底考えられない。かさねて言うようであるが、恐らく千代台附近の第一期相模国府に付属した国府の津であったろう。

又、「正倉院文書」（奈良東大寺文書）天平七年相模国封戸租易帳に名をつらねている国司以下の署名の中に、正六位上行掾勲十二等酒波人麿の名の見えることは、この仁がこの地の国造級の酒匂の豪族の出身であることを示し、この附近でも顔も売れており、圧えも利くところから後の在庁役人の早い現われとして、国府の仕事にたずさわっていたものと思われる。おそらく第一期国府所在地は酒波氏の宅をしばらくの間利用していたのではなかろうか。そうなると国府に通ずる古道であるが、酒匂から今の新田、多古より久野に出て舟原から明神嶽・碓氷峠、宮城野より仙石原、乙女峠を越え御殿場附近の兵部式の横走駅に出たのだろう。仙石原中学校の敷地からは弥生式土器、その他が発見されており、万葉集の「足かりの箱根山に粟まきて、実とはなれるを、あわなくとあやし」と詠われた歌もこの仙石原であったろうと一部では解されているが、

又、久野からも仙石原とまったく同じ土器が出ているのを見ても当時の相模国府に通ずる古道であったのではなかろうか。ところで延喜式に見える駅名の順序は、当時の公路の駅順を示したもので、この順序は大体奈良時代の交通路を踏襲したものといわれている。そして兵部式の言う道順は各国の国府をつなぐ順であったことはいうまでもなかろう。そして、この国の場合即ち坂本駅（関本）から始まる駅路の順は次が小総であって、箕輪・浜田と続いている。地名辞書では小総駅は酒匂町にあてているが石野瑛氏は二三の著書の中で国府津町に当てているが又、片岡永左衛門氏にも説があって、下中村の小竹にあてていると言う。もし小総が、小布施の地名を和同六年好字の詔によって、小総としたならば、小総は酒匂でなくてはならないだろう。延喜式の駅路が大体奈良朝の駅路を襲っていると すると、相模の国府が海老名にあった場合駅路は直接東に国府の地に向うべきではなかろうか。即ち坂本から秦野・伊勢原の道をとるのが順路ではなかろうか。それが坂本から松田を経て酒匂川沿いに南下して小総駅に出て、海岸沿いに二宮町国府の地（平安後期移転した余綾の国府の地）に大迂廻する必要が何故あったのだろうか。私の知るかぎり、これまでの歴史家がこの疑問に触れていない（？）のは恐らく私の不注意な見逃しであろうか。そしてこのように考えてきた場合一ばん都合がよいことは、延喜式の駅名の順序に不自然さがみられなくなってゆくことである。海老名の国府の場合では前述のように坂本駅より、小総駅に南下する理由の説明がつき難いことである。因みに日本後紀巻二十七の弘仁十年二月丁卯の条には、簡単に「相模国金光明寺わざわいす」とあって、この年この国の国分寺の焼けたことが誌されてある。私はこの記事によってこの時焼失した国分寺は再興されることなく、当時海老名にあった古式寺院をもってこの国分寺に代替したのではなかったかと考えているが、国府もその時同じく炎じて海老名に移ったものとは考え難い。これまでの推考から相模の第一次国府が酒匂平野に置かれてあったとするならば、先に述べた多古から久野を経て明神嶽、碓氷峠より仙石原、乙女峠を越して横走

石垣山観光開発への一私見

柴田善生

駅は直接相模国府につながる道であって、足柄峠を越して関本に出る道よりも令制下の時代にあっては、万葉集の歌などを参考にすると、むしろ当時の主要街道であったように思われてくるのである。（つづく）

見出しは大そう立派だがなんのことはない、石垣山を戦さごっこの遊び場にしてその効果を期待するということである。

昔の話であるが、今の将棋の木村名人がかっての海軍大学に出講したことがある。それは専門の棋道による戦術の開眼である。要するに機械的な人間になりつゝある当時の海軍大学生に棋譜を通じ、その妙手による腕のある大戦略家そしてこの育成を目的としたものらしい。

こういった意味で石垣山を戦さごっこの遊び場として、新らしい境地に立った観光開発の対策に取り上げようではないかという提言である。勿論市の当事者がこの石垣山戦跡保存というか、又観光開発的要素をもり上げるべく、且又大資本の魔手から守るべく多大の努力を払ってこられたことは知る人ぞ知るところであるがこゝでは〝よりよく〟という言葉で敢て申上げたいのである。乞御諒恕。

「右に見えますのは、一夜城で有名な石垣山で御座います」

自分だけわかったようなガイド・アナウンス。聞いている方もあれば一夜城かといった調子。知らないものほど強いものはない、言い放しの聞きっ放し。やゝしばらくたって一夜で城が建つわけねえじゃあねえかとお隣りさんと押問答。ガイド嬢にその由来を聞き直そうと思っても次から次えのアナウンスでその隙がないそのまま熱海で解散という段取り、一夜城の疑問はそのまゝ持越しのお国帰えりと相成る次第である。

石垣山の頂上の所謂一夜城に立って四囲を展望すると歴史的典趣というか、小田原城陥落の姿がなんとなく眼底を去来する。又かように彼我の戦略的地形がまざまざと俯瞰できる格好の地であり、他にこんな工合のいゝ場所はないだろう。

小田原城攻略当時の布陣状況の原形をそのまゝ示す大きな歴史俯瞰国なり模石垣山山頂に設置して、点滅式電灯によっ専従説明者にあたかも棋譜を講ずる木村名人よろしく、秀吉進攻の過程を指示する。その合の手には一夜城真の由来を解明し、秀吉、淀君の濡れごとの一部を語るなど、二時間位の間はもてる、しかも面白く有益に歴史観に浸ることができる。その上観光客に別途問題を与えて「あなたならどうしますか」のビラ刷りのアンケート用紙に各個の作業を行うこともよい。あーでもない、こうでもないあっちに立ったりこっちに立ったりして一日隊長、一日殿様を満喫してくれるだろう。

その帰途は小田原城天守閣見学である。その閣楼から石垣山方面を眺望して各個の戦術眼を駆使して防禦から攻撃に転ずるのも面白い。

指呼の間にある彼我の位置がとても好適な初歩的現地戦術の場であることである。

小田原城を中心とする一日分の観光資源を忘れてはならない。箱根を目指す遠来の客にはいまのところ無理にしても、手初めに東京の小中学生、高校生、一般リクリエーション、グループにも役立つことであろう

小田原城天守閣再現によって小便横丁の汚名からいくらか脱し得たことは毎日の天守閣見物の数を見てもわかるように、加速度的に進んだ近代文明の不消化は漢方薬復古、リバイバル胃散と求めている。それに加えて小田原は歴史の源泉ともいったところ、ボーリングすればいくらでも新史実が勇然として大プールを形成する。

いま頃戦術でもあるまいがという人もいるだろうが日本の歴史に戦さがなかったら何にか残るだろう。それをそのまゝ戦争に結びつける平和主義者的ではあまりにも考えが浅すぎる。

日本の戦さは何にを教えてくれるか。これを倫理的に解明することも意義があるし、人造りの根本理念を涵養するのにも大きな役割りがある。

日本の地位は、しかもこれからの日本の地位は戦術も高等に属する課程を必要とするであろう。

勝つか。負けるか。

この簡単な二元に至るまでにどれだけの要素が必要であろうか。

近頃古本屋のベスト・セラーズになった旧日本軍の「作戦要務令」も孫子の兵法書も、絞りに絞った勝つ原理を解明した。しかもその方法を具体的に説いたものだから多くが読まれて現代企業形態に転用したのである。つまり現代的にアレンジした日本の戦争史が身近に手取り早く人間に、社会に教えを与えてくれる。

こうした基盤のもとに「石垣山観光開発」がよりよくなされることが望ましいしかもそれが「小田原史談会」の大きな使命ともなれば幸甚この上もない余栄ともいえよう。

ちなみに、小田原城天守閣―石垣山一夜城ロープウエイの新会社の設立が小田原人の手によってなされることも切望してやまないものであることを附言してこの稿を擱筆する。

編集後記

▼巻頭「変貌した小田原」を書いて下さった在京の井上康文先生は小田原の産んだ有名な詩人である。私は一面識もないが、先生の高名はかねてから承知しており、郷土愛のために一文を草して下さいと、お願いしたところ、快くご承諾の上早速玉稿を送って下さったそのご厚意に対して心から感謝しているのである。いま郷土文化館前にある北村透谷の記念碑創設当時の寄付名簿には北原白秋・福田正夫・井上康文の三氏が発起人となってそれぞれ自署されている。この帳簿を見ても思い出は深い（この帳簿も文化館に陳列中）私は先生が益々ご健在であり、おりおり史談会もご指導下さるよう祈ってやまない。

▼紙面の都合により各位のご寄稿を来月に廻したのも相当にあります。何しろ四面のうち一面は広告にとられ、残る三面を工夫して割当てねばならず相当苦心します。悪しからずご諒承を乞う。（M）

史蹟めぐり並に報徳祭ご案内

来る九月二十日報徳祭当日につき、これに参加のため前日の十九日に市内並に上郡・下郡の主なる地の史蹟めぐりを行う。（解説者　副会長　中野敬次郎氏）

当夜、栢山の報徳会館に一泊して祭典に参列する予定で会員は勿論広く一般のご参加を希望しています。

詳細は最寄の理事または郷土文化館内事務局へ御申し出下さい。

小田原史談会

松坂屋製菓本舗
小田原市十字二
電話五二七六番

きそば
寿庵
小田原駅前
電話二八六二番

株式会社
小田原百貨店
社長　神戸英次郎

あなたの洋品店
はふや
小田原幸町
TEL 2307

カメラ・写真用品
なんでも揃う
カメラの光輝堂
小田原駅前TEL 5965 4859

寝具の店
花田屋
小田原銀座2
電話3788番

甘露梅
月の衣
小田原駅前
正栄堂菓子舗
電話 5311 5312

高級陶器の店
小田原市緑1～103
小田原銀座通り
株式会社江島屋陶舗
TEL(0465)5427

畳表・日用品
問屋
茶利商店
小田原市多古25
電話2341・2374

建築金物
家庭金物
株式会社星崎仲吉商店
小田原市多古412番地
電話 2718

資生堂ホールセール（特契店（ベルマン，パピリオドール，マナー，キャロン婦人靴下代理店
有限会社山一商店
小田原市井細田428
電話 3553

プラスチック
成型加工
東海化成株式会社
取締役社長　滝本友信
電話小田原五九二七番

松風
銘菓
千代菊
銘菓
甘露梅
銘菓（県指定の店）
電話2376
集栄堂本店

化粧品
おしゃれ彩華
松屋
小田原錦通り
電話三三六

純良医薬品
株式会社オダワラ薬局
錦通り電三、〇四八

御料理
御弁当
仕出し
株式会社東華軒
代表取締役　飯沼相三郎
小田原駅前
TEL (0465) 5061～2

志澤
TEL3131

趣味の陶器
江島屋
小田原箱根口
電話6602

写真
イガラシ
小田原市幸3
TEL2534番

平野商会
平野久雄
小田原市十字三
電話(〇四六五)二四四九番

伊豆箱根鉄道株式会社
大雄山線
運営事務所

小田原報徳
自動車株式会社
太陽自動車
株式会社
代表者　曾我律之助

楽しい生活
明るい読書
八小堂
小田原駅前 TEL5388～9

印刷物は
弘英印刷へ
小田原市井細田八一
電話四、一〇八番